科学的介護情報システム（LIFE）を活用した
介護過程実践事例集

令和３年度社会福祉推進事業

科学的介護情報システム（LIFE）を活用した介護過程実践に関する調査研究事業

令和４（2022）年３月
株式会社コモン計画研究所

科学的介護情報システム（LIFE）を活用した介護過程実践事例集

＊＊＊　contents　＊＊＊

はじめに 1

■本書を活用するにあたって 1

■本書の構成 2

1　LIFE を活用した介護過程実践とは 2

2　事例から得られる示唆 2

3　LIFE を活用した介護過程の実践事例 2

1　LIFE を活用した介護過程実践とは 3

■ 科学的介護情報システム（LIFE）とは 3

■ 介護過程とは 6

■ LIFE を活用した介護過程実践とは 6

2　事例から得られる示唆 7

■ LIFE 導入による取組・工夫と介護過程実践への効果や影響 7

❶アセスメント等書式を新規作成・変更した 7

❷研修・勉強会等を開催した 8

❸会議体を創設・変更した 9

❹介護リーダーの役割を周知・明示した 10

❺介護リーダーや介護職に具体的役割を与えた 10

❻実施や評価の精度を上げる取り組みを行った 11

❼①～⑥を後押しする業務改善を行った 12

■ 介護過程を効果的に進める要素との関係 12

3　LIFE を活用した介護過程の実践事例 14

■ 事例の留意点と見方 16

事例 1 特別養護老人ホーム サンシャイン大森 18

車いすの日常から歩ける可能性を見つめ直した取り組み 20

事例２ 特別養護老人ホーム あけぼの.....22
実践１　読書と食後の運動をとりいれ自分らしい日常生活を維持する取り組み 24
実践２　支援を拒み体重減少が顕著な人への関わり..... 26

事例３ 特別養護老人ホーム 潤生園 28
躁うつ状態時の分析を通して安定した日常生活につなげた取り組み..... 30

事例４ 特別養護老人ホーム なのはな苑ふくおか 32
クモ膜下出血の後遺症により失いかけていた意欲を取り戻すための取り組み..... 34

事例５ 介護老人保健施設 もえぎ野 36
「食べたい」という利用者の思いを叶える食の支援..... 38

事例６ 介護老人保健施設 あいの郷 40
依存が強い状態から自分でできる範囲を広げる取り組み 42

事例７ 介護老人保健施設 紀伊の里 44
実践１　排せつ動作の回復を経て在宅復帰を果たした取り組み..... 46
実践２　うつ状態と低栄養状態からの回復を目指した取り組み..... 48
実践３　著しい BPSD が改善するまでの関わり 50

事例８ ツクイー宮開明.....52
ベッド上の生活から座位保持して生活ができるまでの取り組み 54

事例９ デイサービスセンターふぁみりぃ.....56
パーキンソン症状に伴い縮小した生活の幅を広げる取り組み..... 58

事例 10 フロイデグループホームひたちなか 60
安心して食べられる支援を探求した取り組み..... 62

事例 11 愛の家グループホーム国分寺本多.....64
利用者の願いに向き合い日常生活の中で機能改善を図る取り組み..... 66

事例 12 小規模多機能ホーム大宮.....68
在宅での生活に意欲と主体性を取り戻すための認知症ケア 70

事例 13 看多機かえりえ河原塚 72
終末期の利用者の願いと日常生活を整える取り組み 74

● 事例及び執筆ご協力者一覧 ● 76

はじめに

■本書を活用するにあたって

「ＬＩＦＥってなんだろう?」「介護過程に活用する？」と、本書のタイトルを見て思われた方もいると思います。同時に、「やらなきゃいけないの？」「また新しいことを始めるなんて面倒！」と躊躇してしまう方もいるのではないでしょうか。

本書は、題名のとおりＬＩＦＥの導入や運用への取り組みを、介護過程実践の推進及び深化に活用できないかというチャレンジとそのまとめです。

掲載している事例、そこから得られた示唆には、ＬＩＦＥの導入や活用を、介護過程実践の推進・深化につなげていく方法がちりばめられています。事例から得られるヒントを受け止め、まずはできるところから取り組んでみることをお勧めします。

介護過程実践ができていない、まず一歩を踏みだそうとしている施設・事業所はもちろん、いま実践している介護過程をより深化させたいと考えている施設・事業所のいずれにも参考となる事例を掲載しています。

なお、本書のミッションの軸足は介護過程実践の推進・深化であり、それにＬＩＦＥ導入や運用を活用する構図となっています。ＬＩＦＥの使い方や運用の仕方を理解するためのものではありません。ＬＩＦＥについては、３ページからの「１科学的介護情報システム（ＬＩＦＥ）とは」で簡易に説明をしています。

本事例の作成のために行ったアクションリサーチは、試行錯誤、悪戦苦闘の連続でした。リサーチに協力してくださいました施設・事業所の方たちも同じであり、より深くその想いに対峙したのであろうと想像されます。しかし、リサーチをすすめていくと「こんな発見があった」「自分たちの介護過程を整理し、見直す機会になった」という、少しうれしい現実も見えだしたのです。

ＬＩＦＥも介護過程も、ご利用者様へのケアの質の向上を目指すところは同じです。そしてこれらの取り組みは、働く人にも、組織にも好循環を導くことにつながる取り組みです。本書を参考に、まずはできる一歩から、１つでも多くの施設・事業所の皆様に取り組んでいただけることを期待しております。

■本書の構成

1　LIFE を活用した介護過程実践とは

ＬＩＦＥや介護過程に関する基本的な解説とともに、「ＬＩＦＥを活用した介護過程実践」の取り組みの視点について解説しています。

2　事例から得られる示唆

13 の事例調査から得られた示唆として、（１）LIFE を活用した具体的な介護過程実践の取り組みや工夫、（２）LIFE の活用による介護過程実践への効果、（３）介護リーダー・介護福祉士の役割についてまとめています。具体的にどの事例が参考となるのか、「３　LIFE を活用した介護過程の実践事例」に紐づけた解説をしています。

3　LIFE を活用した介護過程の実践事例

下記の事業者にご協力いただき介護過程を実践し、その取り組みを実践事例として掲載しています。事例の見方については 17 ページを、具体的な事例は 18 ページ以降をご参照ください。

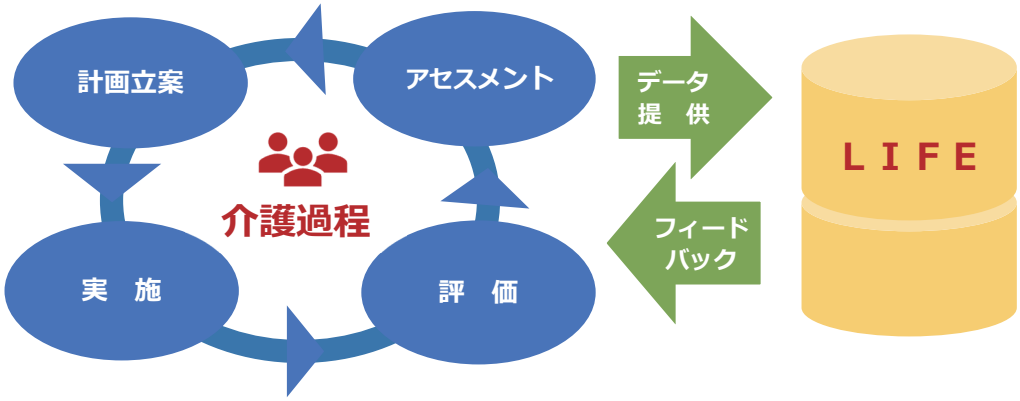
介護老人福祉施設	事例 1	サンシャイン大森
	事例 2	あけぼの
	事例 3	潤生園
	事例 4	なのはな苑ふくおか
介護老人保健施設	事例 5	もえぎ野
	事例 6	あいの郷
	事例 7	紀伊の里
通所介護	事例 8	ツクイ一宮開明
	事例 9	デイサービスセンターふぁみりぃ
認知症対応型共同生活介護	事例 10	フロイデグループホームひたちなか
	事例 11	愛の家グループホーム国分寺本多
小規模多機能型居宅介護	事例 12	小規模多機能ホーム大宮
看護小規模多機能型居宅介護	事例 13	看多機かえりえ河原塚

1　LIFE を活用した介護過程実践とは

■ 科学的介護情報システム（LIFE）とは

厚生労働省では、平成 28 年度より通所・訪問リハビリテーションデータ収集システム（ＶＩＳＩＴ）、令和２年５月より高齢者の状態やケアの内容等データ収集システム（ＣＨＡＳＥ）を運用していましたが、令和３年４月よりこれらを一体的に運用することとなり、科学的介護の理解と浸透を図る観点から、名称を「科学的介護情報システム」としました。「科学的介護情報システム」の英訳である「**L**ong-term care **I**nformation system **F**or **E**vidence」の頭文字をとり、通称として「ＬＩＦＥ」と呼んでいます。

ＬＩＦＥは、根拠に基づく介護を実践し、介護の質の向上を目指す取り組みです。具体的には、利用者に関する情報等のデータを提出し、それを分析したフィードバックをもとに、根拠ある介護、つまり介護職であれば介護過程（ＰＤＣＡ）に活かしていきます。ＬＩＦＥの活用は「加算」に紐づいているため、“加算をとるため”という認識が生じやすいかもしれませんが、利用者へのケアの質の向上を図る取り組みであることを忘れてはなりません。



※ＬＩＦＥの詳細は下記のウェブサイト（厚生労働省）をご参照ください。
厚生労働省：https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000198094_00037.html

ＶＩＳＩＴやＣＨＡＳＥは一部のサービスに限られていましたが、ＬＩＦＥでは適用されるサービスが広がっています。つまりＬＩＦＥの活用は、介護職が実践する介護過程に、これまで以上に科学的介護の根拠づけを持たせることができると考えられます。対象となるサービス種別、加算は次のとおりです。

LIFE の活用が要件として含まれる加算一覧

【介護保険施設】

	科学的介護推進体制加算（Ⅰ）（Ⅱ）	個別機能訓練加算（Ⅱ）	ＡＤＬ維持等加算（Ⅰ）（Ⅱ）	リハビリテーションマネジメント計画書情報加算	理学療法、作業療法及び言語聴覚療法に係る加算	褥瘡マネジメント加算（Ⅰ）（Ⅱ）	褥瘡対策指導管理（Ⅱ）
介護老人福祉施設（地域密着型含む）	●	●	●			●	
介護老人保健施設	●			●		●	
介護医療院	●				●		●

	排せつ支援加算（Ⅰ）（Ⅱ）（Ⅲ）	自立支援促進加算	かかりつけ医連携薬剤調整加算（Ⅱ）（Ⅲ）	薬剤管理指導	栄養マネジメント強化加算	口腔衛生管理加算（Ⅱ）
介護老人福祉施設（地域密着型含む）	●	●			●	●
介護老人保健施設	●	●	●		●	●
介護医療院	●	●		●	●	●

【居宅サービス、地域密着型サービス】

	科学的介護推進体制加算	個別機能訓練加算（Ⅱ）	ＡＤＬ維持等加算（Ⅰ）（Ⅱ）	リハビリテーションマネジメント加算（Ａ）ロ（Ｂ）ロ	褥瘡マネジメント加算（Ⅰ）（Ⅱ）	排せつ支援加算（Ⅰ）（Ⅱ）（Ⅲ）	栄養アセスメント加算	口腔機能向上加算（Ⅱ）
通所介護	●	●	●				●	●
地域密着型通所介護	●	●	●				●	●
認知症対応型通所介護（予防含む）	●	●	△				●	●
特定施設入居者生活介護（予防含む）	●	●	△					
地域密着型特定施設入居者生活介護	●	●	●					
認知症対応型共同生活介護（予防含む）	●							
小規模多機能型居宅介護（予防含む）	●							
看護小規模多機能型居宅介護	●				●	●	●	●
通所リハビリテーション（予防含む）	●			△			●	●
訪問リハビリテーション				●				

△予防給付を除く

■ 介護過程とは

介護過程とは「根拠に基づいた介護実践」であり、「アセスメント・計画立案・実施・評価」の各段階から構築され、介護職チームによって継続的に実践される一連の介護支援です。

その目的は、利用者の尊厳の保持と自立支援とともに、利用者が望む生活を実現することにあります。この目的は、個々の介護職が経験や勘による場当たり的な介護を行っていては達成できるものではありません。また、１人の有能な介護職の支援のみで達成できるものでもありません。つまり、利用者の望む生活の実現を具体的に達成するための目標と、それに紐づく根拠ある支援内容、介護実践が介護福祉士を中心とした介護職チームで継続的かつ統一的に実践され、他専門職との連携も含めた総合的な支援として行われてこそ達成できるものなのです。

本調査ではこの介護過程の基本に基づき、各事業者がＬＩＦＥ導入を機に行った様々な取り組みを通じて、現場で実践される介護過程にどのような変化・影響があったかをまとめています。そして各事例における介護過程の各段階において、実践内容や介護リーダー、介護職チーム、組織の取り組みを整理し、その効果や利用者の受益・変化、新たな課題と今後の展望としてまとめています。

■ LIFE を活用した介護過程実践とは

ＬＩＦＥは運用が開始されて間もないため、本事業においてはＬＩＦＥのフィードバック情報が十分に活用できない状況にありました。そのため本書の事例は、ＬＩＦＥのフィードバック情報を活用した介護過程実践という視点ではなく、ＬＩＦＥの導入や運用をきっかけに介護過程実践をどのように前進させたか、あるいは見直したことは何か、ＬＩＦＥの導入や運用をしたことで介護過程にどんな変化や効果があったかという視点で取り組み、まとめた事例となっています。

ＬＩＦＥは、フィードバックの活用方法に大きな関心が集まっており、それが大変重要であることは事実です。しかし、本書の事例を見ていただくとわかるように、フィードバックの活用とは別に、介護過程実践の推進・深化には一定の効果がありました。本書の事例をヒントに、ＬＩＦＥ導入をきっかけとして、介護現場の介護過程実践の推進・深化がすすむことを期待しています。

2　事例から得られる示唆

■ LIFE 導入による取組・工夫と介護過程実践への効果や影響

LIFE 導入をきっかけに

❶アセスメント等書式を新規作成・変更した

参考となる事例番号												
1	2		4	5	6	7	8	9	10		12	13

ＬＩＦＥの加算算定に伴い、事業者には必要な評価項目の情報収集が求められます。これは多くの利用者の最新情報を改めて確認しなければならない作業であり、既存の業務プロセスの中で利用者情報を蓄積してはいるものの、中には収集していなかった新たな項目もあります。

改めて必要な情報収集を行わなければならないことなどから、漏れがないように必要な評価項目が網羅されたアセスメントをはじめとする各種の新規書式作成や既存書式を変更する取り組みがありました。またＬＩＦＥ加算の支援計画書を工夫する取り組みもありました。一方、中には加算算定項目や指定評価スケールに縛られすぎることがないように、利用者の想いなどの情報を記載する書式の作成や、逆にそれまで利用者の生活全般に関する職員の気づきを記載していた書式を、あえてＬＩＦＥ算定に必要な機能訓練場面に絞るといった変更を行い、職員の観察ポイント・情報収集の焦点を絞る工夫をする取り組みもありました。

❶の介護過程実践への効果や影響は？

A. アセスメントポイントが組織の共通言語となった
B. 客観的指標の推移から、利用者の課題や仮説、目標が立てやすくなった
C. 利用者への支援効果を客観的に評価しやすくなった
D. 自分達の組織が行っている利用者支援の自己評価ができた
E. 介護リーダーが利用者のアセスメントポイントを理解できた
F. 書式にそった情報収集機会を介護職が経験できた

LIFE 導入を
きっかけに

❷研修・勉強会等を開催した

参考となる事例番号												
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13

ＬＩＦＥ導入をきっかけに、なんらかの研修や勉強会は全ての事例で取り組まれていました。

ＬＩＦＥ導入の初期に行われることが多くみられたものとして、ＬＩＦＥの目的・方向性に関する研修、新しく作成したアセスメント等書式の説明などの現場実務に関する説明会などがありました。また、ＬＩＦＥ導入と法人理念の浸透を併せて行う研修、介護リーダーに対して介護リーダーの役割や介護過程や多職種連携などについて集中的に研修を行う事例もありました。

そして、介護過程の実施の段階で行われた研修会や勉強会があります。例えば、他職種と共同で認知症の勉強会を開催したり、他専門職から専門的知見をレクチャーしてもらい、それを介護職チームで共有するための実践を指導する勉強会などの取り組みもありました。

いずれにしても、ＬＩＦＥという新たな業務システムの導入や介護過程実践の向上においては、組織の状況に応じた集合的な研修や勉強会、説明会などは必要な取り組みであることがわかりました。

❷の介護過程実践への効果や影響は？

G. 研修を通じて職員に対する介護過程の教育機会が設けられた
H. 介護リーダーに求められる役割と自覚を促す機会となった
I. 介護過程実践チームの一員として介護職の役割の自覚を促す機会となった
J. 利用者支援に関する介護職の不安解消や支援方法の統一機会となった

LIFE 導入を
きっかけに

❸会議体を創設・変更した

参考となる事例番号												
1	2	3	4	5		7	8		10		12	13

なんらかの会議体を新たに開催する仕組みをつくったり、既存の会議体の内容を変えたりする取り組みがみられました。創設された会議体の目的に注目してみると、介護過程の各段階である「アセスメント」「計画立案」「実施」「評価」を反映するものとなっている点が見えてきました。

具体的には「アセスメントを深めるためのカンファレンス・情報共有」「立案した計画案を他専門職に共有して意見をもらう」「立案した計画内容を介護職員に周知する」「計画の実施状況や課題を共有し検討する」「計画内容について振り返り評価し更新を検討する」といったものです。なかには、この会議体を介護リーダーに運営させ、リーダーシップを発揮させる教育的狙いを持たせた事業者もあり、介護過程実践に加えて、人材育成の場としての意味合いもありました。

介護過程の各段階を目的とした会議体については、すべての段階で開催している事業者、一つの段階のみ開催している事業者、いくつかの段階を兼ねた形で開催している事業者など様々でした。開催状況は、月１回開催、朝の申し送りなどに目的を加えて開催するスタイル、毎月の定期ミーティングを計画書について話し合うカンファレンスに変える、毎日短時間のショートカンファレンスを行うなど様々でした。

特筆すべきは、いずれの会議体にも共通していたことは構成員にはほぼ介護リーダーが出席していたということで、これは全事業者共通でした。

❸の介護過程実践への効果や影響は？

K. 利用者支援に関する話し合いを通じて情報共有を行える機会となった
L. 他職種連携の実際的役割を担うことで介護リーダーの人材育成効果があった
M. 組織における介護リーダーの役割と存在を周知する効果があった
N. 他専門職が介護職の専門性に触れる機会となった

LIFE 導入をきっかけに

❹介護リーダーの役割を周知・明示した

参考となる事例番号												
1					6	7				11	12	13

組織や会議体、介護過程を実践する中で介護リーダーの役割を明確化し、介護職員や他専門職に周知し、実際の業務の中で中核的な機能を果たすことを明示するという取り組みがありました。

この取り組みは、大きく３つのパターンに分類できます。１つ目は元々介護リーダーという役職にあった者に改めてその役割を本人と職員に周知した、２つ目はＬＩＦＥ導入をきっかけに介護過程実践の中核的役割を新たに付与した、３つ目は小規模で比較的フラットな階層組織の中で期待する介護職員の１人をリーダー的役割として抜擢したパターンです。

役割の明示による意識づけは自他ともに、責任の所在を明らかにしたことであり、介護過程実践においては重要な取り組みの１つだったと考えられます。

LIFE 導入をきっかけに

❺介護リーダーや介護職に具体的役割を与えた

参考となる事例番号												
1		3	4	5		7	8	9	10	11	12	13

介護リーダーや介護職に具体的な役割を付与する事例も多くありました。

具体的には、様々な会議体において介護リーダーの出席が求められ、他専門職との連絡や相談の窓口となる役割を与えたり、新たに個別介護計画書やＬＩＦＥ加算算定に伴う計画書を立案する中心としての役割を与えた事例もありました。計画作成については、ケアマネジャーなど他専門職との共同立案方式や、他専門職による評価チェック機能を経て立案するなど事例によって様々でした。

介護リーダーの役割を明示された者は介護職に対して、利用者情報の報告を徹底すること、ＬＩＦＥ関連書式含めて記録を徹底するといった役割が与えられ、これらは既存業務の強化とも言えます。また、一定数の利用者担当制度を導入し、自分の担当利用者の情報収集を主として担うという役割を与えた事例もありました。一般介護職にも情報収集の役割を通じて、観察ポイントや利用者状態の変化に触れることで、間接的に教育効果がある結果となっていました。

LIFE 導入を
きっかけに

❻実施や評価の精度を上げる取り組みを行った

参考となる事例番号												
	2	3	4		6	7						

介護過程における実施や評価の精度を上げるための取り組みもありました。

例えば、個別介護計画の評価期間を短期間に設定し、利用者の状態変化に応じて支援内容を修正しやすくした計画書で、進捗状況や達成度を評価する取り組み、実施内容の達成度を介護職だけでなく他専門職なども含めた形でチェックする仕組みを導入した取り組みなどがありました。

他には、既存の計画書や仕組みとの整合性を考えた事例もありました。例えば、ＬＩＦＥの評価項目を３か月単位での評価と定め、ケアプランと個別介護計画と連動させる仕組みとして全体の整合性を整えた取り組み、他専門職含めて施設内に様々存在する各種計画書がバラバラに運用されている実態から、更新月を利用者ごとに連動させて全体の支援の連動を持たせる工夫などに取り組んでいました。また、別の事例では、情報を一元的に集約し管理するためのオリジナルファイルや書式をつくった事例がありました。この中には介護職だけでなく、他専門職の視点でも情報が集約され、横断的な視点で評価されていました。

介護過程における実施や評価の精度を上げるための取り組みは、以前から介護過程実践に積極的に取り組んでいる事業者に多く見られました。既に介護過程が運用されているところにＬＩＦＥが導入されたという背景から、既存業務との混乱を避けるために両者の整合性を図り、介護過程実践の質をより向上させていくことにつながったとみられます。

❹❺❻の介護過程実践への効果や影響は？

O. 介護リーダーが介護過程実践の中で実際に中心的に機能するようになった
P. 介護リーダーの主体性や積極性を育む効果があった
Q. 利用者の変化という成功体験を介護職チームが得られた
R. 介護リーダーの仕事に対するモチベーションが向上した

ＬIFE 導入をきっかけに

❼①～⑥を後押しする業務改善を行った

参考となる事例番号												
	2	3	4	5	6	7	8	9				

①～⑥の取り組み効果を促進したり実現可能性を高めるために行った業務改善としての取り組みがあります。

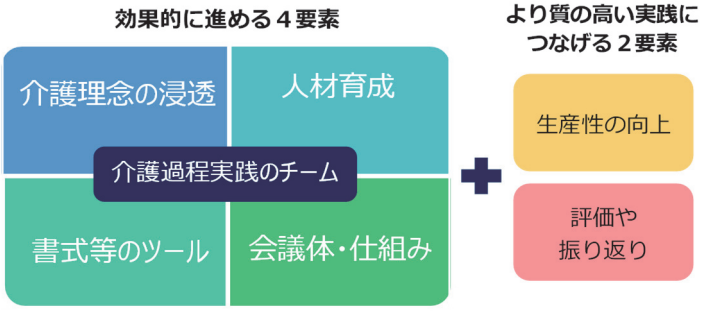
例えば、新たな会議体が開催しやすいように勤務表を 10 日単位で作成したり、個別介護計画書作成に不慣れな介護リーダーのために計画書作成マニュアルをつくった取り組みなどがありました。

また、ＬＩＦＥの導入や介護福祉士の役割、介護過程実践に関する研修や説明会の内容に対する習熟状況を確認するために、職員アンケートを実施したという取り組みもありました。とりわけ注目されるのは、ＬＩＦＥ導入によりアセスメントや観察の評価項目がある程度明確になったというメリットはあるものの、その評価に個人差が生じていることから、均質的な評価に至っていないという課題を見出し、標準化を図るために評価方法の検討を組織内で行うなど、先進的な取り組みを見せる事業者もありました。

■ 介護過程を効果的に進める要素との関係

必要性は認識していてもなかなか本腰を入れて取り組むことができなかった介護過程実践への第一歩、あるいは介護過程のさらなるバージョンアップへのステップに、ＬＩＦＥという大きな制度改正が背中を押した実態が事例からうかがえます。

「介護現場における介護過程実践の実態調査及び効果検証に関する調査研究事業※」においては、介護過程を効果的に進める 4 要素（介護理念の浸透、人材育成、書式等のツール、会議体・仕組み）と、より質の高い実践につなげる 2 要素（生産性の向上、評価や振り返り）が明らかになりました（右図）。

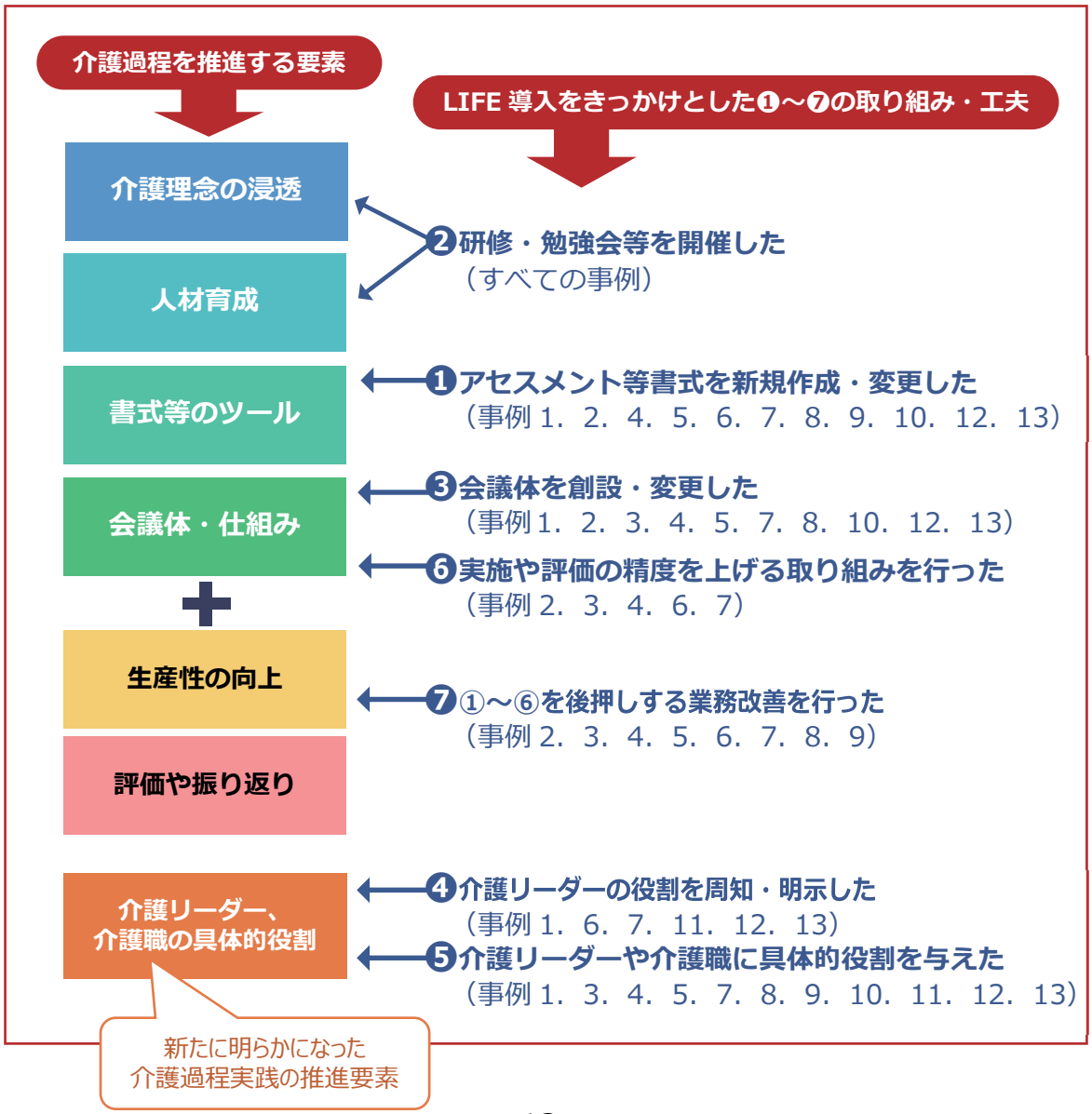


※https://www.comon.jp/dl/project.html
「介護現場における介護過程実践の実態調査及び効果検証に関する調査研究事業報告書」（令和３年３月）

これらの４+２要素と、本年度実施したＬＩＦＥ導入をきっかけとした❶～❼の取り組み・工夫は下図のように整理できます。介護過程実践の推進・深化を図るためにどんな取り組み・工夫をしたらよいか、あるいは、どんな取り組み・工夫をすれば介護過程にどんな効果・影響が期待できるのかを考えるヒントとして、下図の関係図、18 ページ以降の具体的な取り組み事例をご活用ください。

なお、介護過程を推進する要素の「評価や振り返り」（下図ピンク）について、本年度は具体的な取り組みがみられませんでした。組織全体としての介護過程実践への取り組みを客観的に評価することは重要であり、今後の課題といえます。

また、❹ ❺は、昨年度得られた知見（介護過程を推進する要素）に合致するものがなく、新たに明らかになった介護過程実践の推進要素となっています（下図オレンジ）。介護過程実践の推進・深化には「介護リーダー」という中核となる人の存在の重要性が確認できました。具体的にどのような取り組みであったかは、事例を参考としてください。



3　LIFE を活用した介護過程の実践事例

●介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム）

事例 1	**特別養護老人ホーム サンシャイン大森（山形県）** 車いすの日常から歩ける可能性を見つめ直した取り組み	18 ページ～
事例 2	**特別養護老人ホーム あけぼの（埼玉県）** 実践 1　読書と食後の運動をとりいれ 自分らしい日常生活を維持する取り組み 実践 2　支援を拒み体重減少が顕著な人への関わり	22 ページ～
事例 3	**特別養護老人ホーム 潤生園（神奈川県）** 躁うつ状態時の分析を通して安定した日常生活につなげた取り組み	28 ページ～
事例 4	**特別養護老人ホーム なのはな苑ふくおか（愛知県）** クモ膜下出血の後遺症により失いかけていた意欲を取り戻すための取り組み	32 ページ～

●介護老人保健施設

事例 5	**介護老人保健施設 もえぎ野（茨城県）** 「食べたい」という利用者の思いを叶える食の支援	36 ページ～
事例 6	**介護老人保健施設 あいの郷（埼玉県）** 依存が強い状態から自分でできる範囲を広げる取り組み	40 ページ～
事例 7	**介護老人保健施設 紀伊の里（和歌山県）** 実践 1　排せつ動作の回復を経て在宅復帰を果たした取り組み 実践 2　うつ状態と低栄養状態からの回復を目指した取り組み 実践 3　著しい BPSD が改善するまでの関わり	44 ページ～

●通所介護

事例 8	ツクイ一宮開明（愛知県） ベッド上の生活から座位保持して生活ができるまでの取り組み	52 ページ～
事例 9	デイサービスセンターふぁみりぃ（広島県） パーキンソン症状に伴い縮小した生活の幅を広げる取り組み	56 ページ～

●認知症対応型共同生活介護

事例 10	フロイデグループホームひたちなか（茨城県） 安心して食べられる支援を探求した取り組み	60 ページ～
事例 11	愛の家グループホーム国分寺本多（東京都） 利用者の願いに向き合い日常生活の中で機能改善を図る取り組み	64 ページ～

●小規模多機能型居宅介護／看護小規模多機能型居宅介護

事例 12	小規模多機能ホーム大宮（茨城県） 在宅での生活に意欲と主体性を取り戻すための認知症ケア	68 ページ～
事例 13	看多機かえりえ河原塚（千葉県） 終末期の利用者の願いと日常生活を整える取り組み	72 ページ～

■ 事例の留意点と見方

事例の留意点

●用語について、特に断りがない限り以下に統一して表記しています。

・ケアマネジャー
・ケアプラン
・個別介護計画（介護職が介護過程のプロセスにおいて作成する計画）
・理学療法士
・作業療法士
・言語聴覚士
・利用者

●本書で表記している「介護リーダー」は、介護職による「介護職チーム」等をまとめるリーダーであり、介護福祉士資格所持者であることを前提としています。

●「LIFE 導入をきっかけにこんなことをました！」では、ＬＩＦＥ導入をきっかけとした介護過程における 7 つの取組・工夫（7 頁～12 頁）の中で、どの取り組み・工夫を行ったかをポイントとして記載しています。介護過程実践が浸透している場合や、既存のシステムが十分機能している場合などは、**“新たな取り組み“としては行っていない**ということになり、ポイントに記載がない場合があります。

●「◆介護過程と介護職チームの流れ」における Ⓛの表示はLIFEの取り組みです。各事業者が表示した場合のみ記載されています。

●取り扱う事例については、個人情報保護の観点から、対象者の氏名、年齢、性別を明示せず、写真等については個人が特定できないモザイクや塗りつぶし加工をしています。

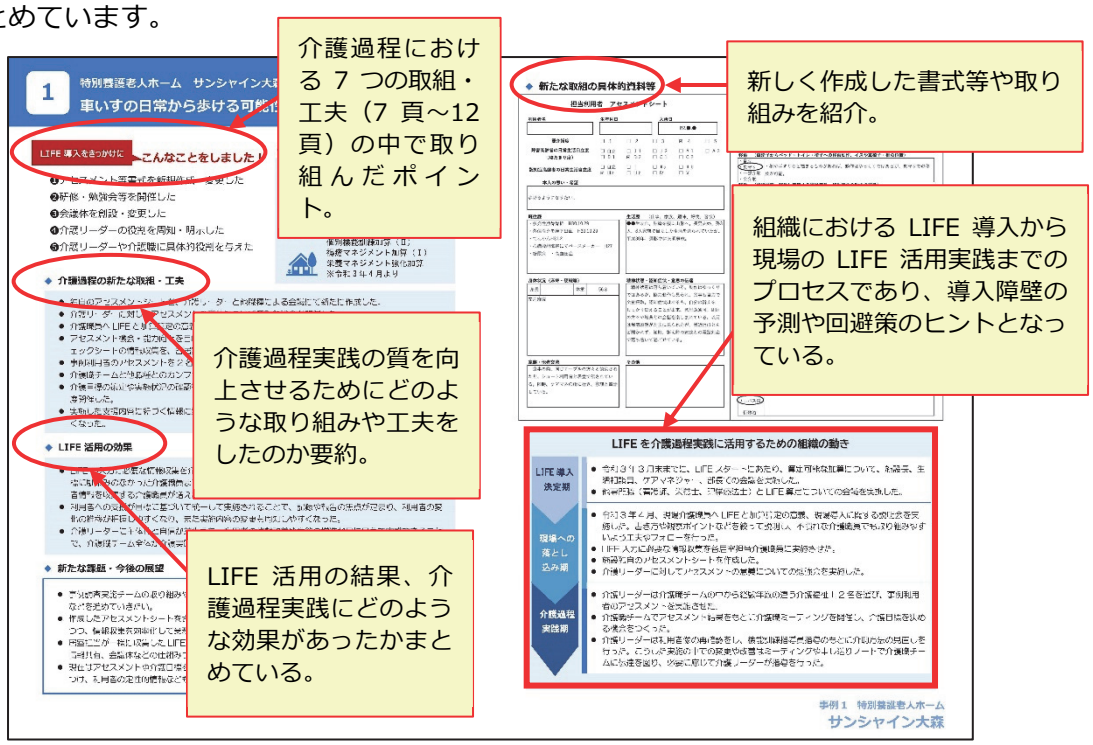
●事例は本調査研究における実践事例調査に基づき作業部会委員及び現場責任者等がまとめました。執筆一覧は、最終ページに掲載しています。

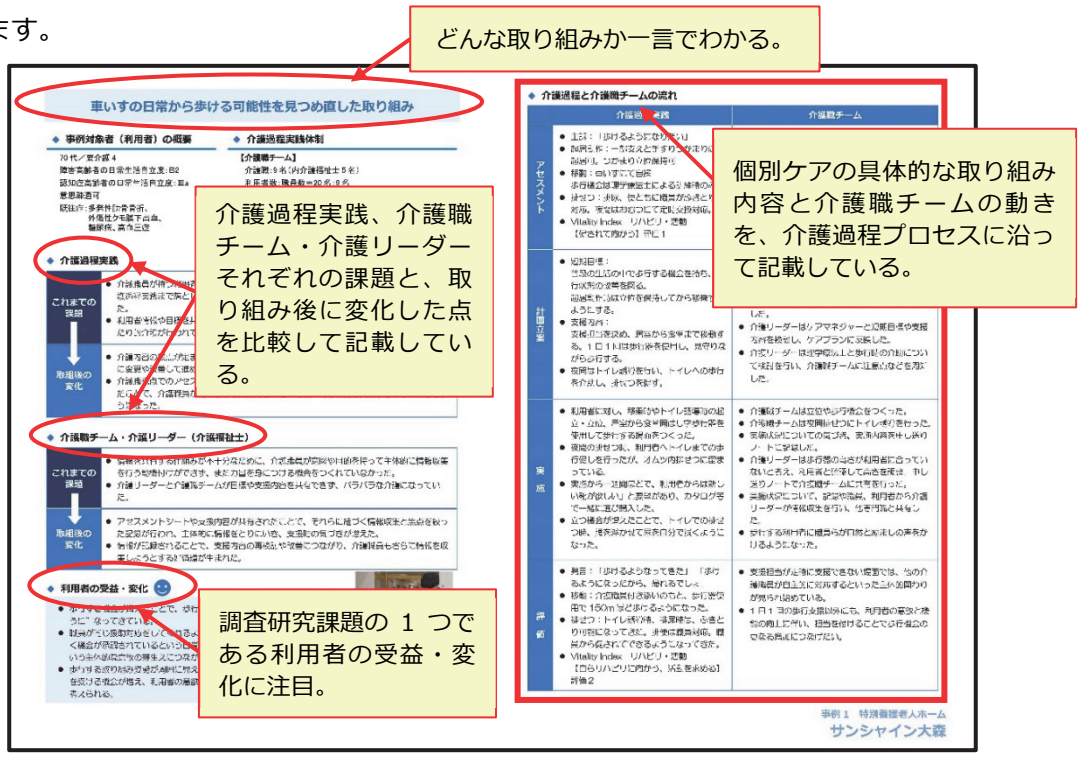
●実践事例を無断で使用すること、複写等をすることは固くお断りを申し上げます。

事例の見方

●見開き１頁～２頁

個別ケアの取り組みを通してどのような取り組み・工夫や効果があったかを総括的にまとめています。



●見開き３頁～４頁

個別ケアの具体的事例について記載しています。複数事例の場合は実践番号がついています。